

文化 | Culture |

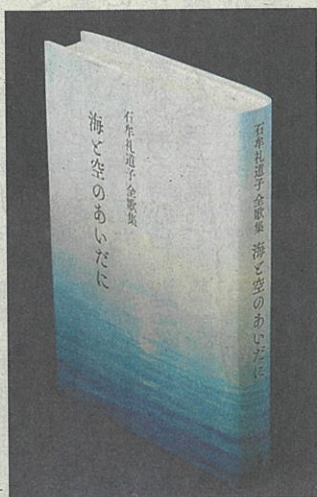
月、水、金、土曜日 掲載

生活部 @kumanichi.co.jp 6-361-3181 FAX:096-361-3290

昨年2月に90歳で亡くなった作家石牟礼道子さんの生涯にわたる短歌670首余りを収録した『石牟礼道子全歌集 海と空のあいだに』(弦書房)が刊行された。16歳で始めた作歌は、石牟礼文学の出発点ともいわれる。その歌の世界について、石牟礼さんと交流のあった作家町田康さんに寄稿してもらった。

寄稿 作家 町田 康

「石牟礼道子全歌集 海と空のあいだに」刊行



『石牟礼道子全歌集 海と空のあいだに』(弦書房、28800円)

『石牟礼道子全歌集 海と空のあいだに』を読んで、それまで驚いたのはそこに、あまりにも激しい、生々しい人の思いがそこに表われてあったことである。と書いてちょっと違つなと思つたのは、表されてあった、と言つと、激しい、生々しい人の思いが文字に変換されてそこにあったかのよつに聞こえるからで、思想や感情を言葉にするといつのはそついつつことと言えはそついつつことなのだけれども、そこに書かれてあったものはいかしてそつしたものでないよう思えた。ではなにかあったのかと言つと、生々しい人の思いそのものがそこにあった。だから読んでみると、書いた人の、その息遣いが耳の近くで聞こえてくるような感じがした。そついつつ意味ではそれはまさに、歌に近かった。といつか、と、歌、だった。と言つと、「だからタイトルに歌集と書いてあるのだ。そんなこともわからない大たわけは即刻死んでください」と優しく声を掛けてくださる方が多分あると思つ。そもそも短歌といつのはそついつつものなんだよ、と。

生々しい人の思いがそこにある



◇まちだ・こう 1962年大阪府生まれ。「くっすん大黒」で野間文芸新人賞。「きれぎれ」で芥川賞。「告白」「宿屋めぐり」「ホサナ」など著書多数。

そのなかでもっとも一般的なものに歌を唱ったり聞いたりして愉快な気持ちになる、スカッとすする。号泣して感情を浄化する、なんてなのがある。玄人の歌手はこつした需要があるから飯を食っていかれる。ところが、ここにある歌を読んでそつした気持ちにはならず、逆に、作者の苦しみが直に伝わってくると言つか、もつと言つと苦しみがつつてくるよつな気がしてこつちも苦しくなる。

通常、悲しみや苦しみを歌つた「作品」は接する者に、自分はその当事者ではない、という安心感に立脚した甘美な陶酔をもたらすが、そつした、作品くささ、作者がその感情に手を加えた手つき・痕跡が一切無く、作者に対して読者に対しても情け容赦なく生な感情が、ゴロリと転がされたよつにそこにあるのである。

私たちは自伝や評伝、評論を読み、石牟礼道子その人がどのよつな道のりを歩んだかを知ることが出来る。そしてその作品を読んで石牟礼道子その人が世界をどのよつに感知・感覚していたかを知ることが出来る。けれども短歌は特別だ。なせなら、そこには、石牟礼道子が私たちの知っている石牟礼道子になる前の、若く、とどろきき弱々しく、危つしい道子の息遣い、呼吸、がそのままそこに転がされてあるからである。

そして二度、驚くのは分量は少ないが、でも後半ともいつべき、歌集『海と空のあいだに』未収録短歌を讀むときである。ここに収められた歌はみな、根底に激しいものを秘めながら美しく調和した、静謐の暴風雨、とも言つべき石牟礼道子の世界に属して、「こ、この間になにかあったんやああ」と絶叫したくなる。しかしそれは愚問。この間に石牟礼道子は多くの作品を書いており、自分らはそれを讀めばよい。ほつしたよつで、復讐り見む。とか言いながら全歌集を讀み、その人に触れる。そんなことをしたいと思つた。

